

AFTERNOON TEA

U.S.-Japan Biomedical Research Laboratories を訪れて

産業医科大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

大淵 豊明

産業医科大学医学部第一生理学講座准教授の橋本弘史先生よりバトンを受け取りました。大淵豊明と申します。私は産業医科大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学に所属しており、現在は、日本学術振興会・海外特別研究員として米国の Tulane 大学に留学中です。主に電気生理学的手法を用いて、ストレスと中枢神経との関連を調べる研究をしています。

留学先である Tulane 大学は、Dr. Schally が何万頭もの豚の視床下部から抽出した LH-RH の構造と活性を見出し、1977 年にノーベル医学生理学賞を受賞したことで知られています。この研究の直接的な立役者は、有村章博士を中心とした日本人研究者達であったことは非常に有名です。有村博士はその後 1985 年に Tulane 大学・日米協力生物医学研究所 (U.S.-Japan Biomedical Research Laboratories) を設立し、多くの日本人研究者をお招きになりました。1989 年には Pituitary Adenylate Cyclase-Activating Polypeptide (PACAP) を発見するなど、神経科学の発展に大きく寄与し続けました。U.S.-Japan Biomedical Research Laboratories では、数多くの御高名な日本人研究者が有村博士と共に研究を行い、今日も神経内分泌学を中心に多くの分野で御活躍されています。(有村博士のご活躍の詳細につきましては、本誌 2010 年 Vol. 72 No. 6, p168-170 矢田俊彦先生による“有村章博士追悼”も併せて御清覧ください。)

現在 U.S.-Japan Biomedical Research Laboratories は研究施設としては閉鎖されていますが、先日、有村博士の奥様であられます有村勝子様から、幸運にも敷地内を案内して頂ける機会が得られましたので、ここで御紹介致します。

当日の朝迎えに来て下さった勝子様は、とても若々しくお元気で、上品な方でした。日本から Tulane 大学の病院へ実習に来ていた医学部の学生さん達と一緒に、勝子様と私の車に乗り分けて現地に向かいました。研究所は、Tulane 大学のアップタウンキャンパスから、ミシシッピ川を挟んだ場所にあり、その敷地面積はなんと 100 万坪におよびます。自動で閉閑する大きな門を通過して敷地に入り、大自然の中にわずかに敷かれた道を車で進んでおりますと、旧弾薬庫で、当時は実験道具などの保管に利用していたという建屋がいくつも見えてきました(写真 A)。屋根に茂る緑は、Tulane 大学のスクールカラーでもあります。さらに行くと沼地がありました。ほとりで車を停めて降りてみると、沼に浮く朽木の上で、二匹のワニが向かい合って日向ぼっこをしていました(写真 B)。沼の付近には、ここでしかみられない珍しい草花もありました。

そこから車でさらに奥へと進み、研究棟に到着しました(写真 C, D)。研究棟に入って一番驚いたのは、10 年近く閉鎖しているとは思えない「臨場感」でした。ミーティングルーム(写真 E)、生理学実験室(写真 F)、触らずにそのままにしてあるという有村博士の書斎とデスク(写真 G)…。ついさっきまで、ここで実験や活発な議論が行われていたのではないかと、とさえ思わせる風景は、そこに置かれてある一つ一つの道具や本に込められた熱意が生み出していたのだと思います。

それから、有村博士が木材から細部までこだわって特別注文で作ったという茶室を案内して頂きました。研究室やカンファレンス室を隣に据えるこの茶室は、研究棟の中で一際異色の雰囲気を持っていました。有村博士は、実験に躰いたり考



えを練ったりする時には、決まってこの茶室に来てお茶をたて、心を落ち着かせていた、と勝子様は懐かしそうに話して下さいました(写真H:左が筆者、右が有村勝子様)。

見学の後は昼食をご一緒させて頂きました。あっという間に時間が過ぎ去り、この日は私の人生の中でも非常に思い出深い一日となりました。

私は、U.S.-Japan Biomedical Research Laboratoriesには、研究の楽しさや発見の喜びだけでなく、難しさとか、苦しみとか、そういったものを

全て含んだ感動が眠っているように感じました。壮絶な研究競争の中を世界の最先端でご活躍され、新しい知見を次々と見出し続けた有村章博士。その知見をもとに、私たちはさらなる神経科学の謎に挑んでいます。今皆様の手掛けているそれぞれの研究のルーツを辿ってみて、機会があれば是非その「地」を実際に訪れてみて下さい。そこにはきっと素晴らしい刺激が待ち受けていることでしょう。

スカイ島旅行記

東北大学大学院医学系研究科

別府 薫

はじめまして、東北大学医学系研究科の別府薫と申します(写真A左)。Duke大学の兎田幸司先生からバトンを受けました。2013年の北米神経科学会(SfN)にて、私のボスである松井広先生が主催する「友達の輪」という夕食会で、兎田先生に初めてお会いしました。2013年のSfNはサンディエゴで開催されたのですが、行きの飛行機での乗り継ぎに間に合わず、急遽、サンフランシスコで1泊することになり、ホテル探しに夜道をさまようというハプニングがありました。翌日の最終便でようやくサンディエゴにたどりついた時には、

一緒に旅をしていた常松友美博士(写真A右、現・Strathclyde大学ポスドク研究員)と思わず抱き合って喜んだのを覚えています。今回は、その常松博士とのスカイ島旅行記について書こうと思っておりますが、ここでひとまず、私の自己紹介をさせていただきます。

私は福岡県の太宰府天満宮の近くで生まれ育ち、子供のころは家で「梅が枝餅」を作るのが好きでした。大学院の修士課程において、九州大学・薬学府の野田百美先生の研究室にて脳科学研究の面白さにどっぷりはまり、研究者を志すきっかけ



となりました。研究を進めるうちに、脳内グリア細胞の活動はきっとすごいに違いない、という期待を抱くようになり、グリア細胞からの信号が神経活動や動物の行動に及ぼす影響を調べる、というテーマ実現のために、博士課程からは生理学研究所の重本隆一先生の研究室へ入りました。生理研では、のびのびと自分の好きな研究に打ち込むことができ、とても恵まれた環境にいることを実感する毎日でした。研究や英語力での挫折は何度かありましたが、直接研究の指導をしてくださった松井広先生や佐々木拓哉先生の超ハイペースなdiscussionに必死についていく日々によりがいを感じ、夢中で電気生理学実験を学んでいました。現在は、東北大学の医学系研究科にてポスドク研究員をしており、未だ謎が解けないグリア信号伝達の機序解明に向けて、相変わらず奮闘を続けております。

九大・生理研・東北大と研究機関を北上?!するなかで、様々な研究者との素晴らしい出会いがあり、その度に、研究を続けていて本当によかったと思います。なかでも、生理研で出会った私の大先輩である常松友美博士には、困った時には何でも報告・連絡・相談をさせていただいております。お世話になってばかりでは悪いな、と思っていた矢先に、彼女が留学先のイギリスで日本を恋しそうにしていることを悟り、イギリスに行って

元気づけてあげよう!と思いたちました。2015年7月のEurogliaに参加する前に、常松博士の留学先のラボに訪問させていただき、研究室見学や私の研究発表など、貴重な経験をさせていただきました。そして、休日を利用して常松さんおすすめの「スカイ島」というスコットランド北部の神秘的な島に出かけることになったのです。島のどこを見渡しても山、草原、羊ばかりの大自然です。建物がほとんどなくて地平線がきれいに見えるからか、空が近くに感じられました。それでスカイ島というのか〜、とぼやいたところ、つづりがskyではなくskye「翼」だ、というツッコミが常松さんから入りました。スカイ島やその道中には、Fairy poolと呼ばれる池やGlencoeという壮大な山々など、絶景スポットがいくつもありますが、私が一番印象に残ったのは、大自然がつくり出した岩‘Old man of Storr’です(写真B)。強風で寒いなか、車を降りて少しだけ山登りをしてみると、雲の合間から尖った岩がドーンとそびえたっているのが見えてきたのです。風にも負けずに力強く立っているOld manを見ていると、強い気持ちでいれば何があっても簡単には倒れない、ということを教えてくれているようでした。スカイ島にて身も心も完全にリフレッシュでき、新たな気持ちでEuroglia学会に参加することができました。最高の夏の思い出です!

冒険への入り口はすぐそこに

理化学研究所脳科学総合研究センター脳統合機能研究チーム

佐藤多加之

デューク大学の兎田幸司さんからバトンを受け取りました，理化学研究所の佐藤多加之と申します。

日々研究に精進する毎日ですが，休日には少し違ったことをしてリフレッシュしています。色々趣味（旅行・鉄道・美術館巡り・ピアノ・カラオケ・ジョギング等）はありますが，ちょっと面白いところで「暗渠巡り」というのがあります。あんきょ，と読みます。NHKのテレビ番組「プラタモリ」で聞いたことがある方もいるかもしれませんが，簡単に言えば蓋をした川です。暗渠化の経緯にはいくつかありますが，高度経済成長期の人口急増に対し衛生環境を保つために，小さな川に蓋をして急ごしらえの下水道として利用したものがよく見られます。蓋をただけなので強度的に弱く，現在でも自動車や大型車が侵入禁止の道路であったり，公園や遊歩道として整備されていたり，あるいは所在なげな細長い土地として放置されていたりと，特徴的な利用がされています。暗渠沿いには橋の欄干の痕跡や，多数のマンホールが密集していたりなど，暗渠の存在を知らせてくれるサインが潜んでいます。また，以前は川であったことから，周りに比べて土地が若干低くなっているのが通例で，慣れてくるとちょっとした道路の起伏や先ほどの暗渠サインから，何だか怪しい！と暗渠センサーがはたらくのです。

では，この暗渠をどのように楽しむのでしょうか。基本は実際に足を運び暗渠の上を歩いてみる事です。街の表通りが動脈とすれば暗渠は静脈と言えるかもしれません。通りをほんの一本隔てたその細道は，旧市街の石畳を抜け，洗濯物の喧騒の下をくぐり，デルタ地帯の灌木をかき分けるが如くの冒険へと私たちを誘うのです。嗅覚だけを頼りに地図無しで突き進むのも一興ですが，不安な時はスマートフォンの地図アプリが便利で

す。都内の場合は「東京時層地図」というアプリがオススメ。現在の地図だけではなく，高度成長期や戦前，大正，明治の地図を重層的に閲覧できるので，時間軸を含んだ立体的な風景を想像することができます。また，ネット上には偉大な先人達が築き上げてきたレポートが多数あり，大変参考になります。ぜひ「暗渠」で検索してみてください。

通勤や通学でいつも通る道，それに交差する細い道。そういえば少し蛇行しているし何か陰湿な雰囲気。ちょうど谷になっていませんか？車止めが見当たりませんか？人間には2種類いるそうです。暗渠に足を踏み入れる人とそうしない人。冒険への入り口は皆さんの周りにも必ずあるはずです。街の新しい表情を見つける旅に出てみませんか。

突然話は変わりますが，一つお願いがあります。日本生理学会には「生理学若手の会」があり，サマースクール，若手研究者フォーラム，シンポジウム，サイエンスカフェなど様々なイベントを開催しています。会費は無料で参加資格は特にあり



渋谷区の宇田川暗渠

ませんのでぜひ会員になってください。さらに、実際にこれらイベントを企画運営している「若手の会運営委員」も絶賛募集中です。我こそはという方ぜひご連絡をお待ちしております。参加方法

など詳しくは「生理学若手の会」で検索していただければと思います。ぜひよろしくお願ひします。

参考文献：「暗渠マニアック！」吉村生，高山英男（柏書房）2015